

阿倍仲麻呂と唐詩人の交遊詩

武庫川女子大学名誉教授 豊 福 健 二

はじめに

「阿倍仲麻呂と唐詩人の交遊詩」と題し、今日は誰でも知っている阿倍仲麻呂について話をする。また、阿倍仲麻呂に関連して、鑑真和尚や阿倍仲麻呂が中国に渡った時の「寧波^{ニンポー}」という港の話も交えて話したいと思う。今回のテーマ「関西地方と中国文学」ということを意識してまとめた。

今から約 20 年前、1997 年に私が所属していた武庫川女子大学日文学科から『阪神間の文学』という本が出版された。日文学部の管宗次先生が中心となって編集し、装丁も管先生が古地図を元にデザインされて出版されたのだが、その本の中で私は「阿倍仲麻呂と唐の詩人たち」という文章を書いた。今回はそのテーマは変えず、詩を中心に「阿倍仲麻呂と唐詩人の交遊詩」というタイトルとして話をする。

交遊詩とは、交際する間に取り交わした詩のことである。本の出版から 20 年以上経って、この間に新たな発見もあり、阿倍仲麻呂についての見方が変わったこともあったので、そのようなことを踏まえて第二版として話をしたいと思う。

阿倍仲麻呂と言えば『百人一首』に出ている「あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも」という歌が有名だが、阿倍仲麻呂にはこの歌以外に伝えられている歌はなく、歌人とは言いにくい。漢詩としては「命を銜^{めい}んで本国^{こく}に使いす」がよく知られており、このほか「失題」「望郷の詩」という詩が現在に伝えられている。また、阿倍仲麻呂が中国へ渡った後、色々な人と交友関係ができ、その交友関係があった人たちが仲麻呂に与えた詩も今回は見ていくことにする。仲麻呂と交友関係があったことを示す詩を残している詩人としては、王維・李白・趙曄^{ちやうとつ}・儲光羲^{ちやうこうぎ}らがいる。趙曄・儲光羲はほとんど知られてないが、王維・李白は大変著名な詩人であり、特に李白は杜甫と並ぶ世界的に有名な中国の二大詩人として評価されている。王維は自然詩人であって、李白・杜甫とほとんど同じ時代を生きた人で、知っている人もいるかもしれない。ここでは、これらの詩人たちの詩を含めて取り上げ、1200 年前にさかのぼって日中交流の一端をうかがってみたいと思う。

1. 阿倍仲麻呂の経歴

阿倍仲麻呂は文武 2 年^{なかつかさ たいふなもり}に中務大輔船守の子として生まれた。西暦では 698 年で、李白が生まれる 3 年前に当たる。仲麻呂が死亡したのは 770 年だが、これは李白と並ぶ

中国の二大詩人である杜甫が死亡した年と同じ年である。杜甫は李白よりも11年後に生まれている。李白は762年に亡くなっているので、仲麻呂は李白が生まれる少し前に生まれて、杜甫が亡くなる年まで生きていたことになる。中国の二大詩人が活躍した時期と全く同じ時期に、日本の阿倍仲麻呂が同じ唐という地で、しかもおそらく都長安を中心とする所で同じ時間を過ごしたことを考えると、非常に興味深いものがある。

仲麻呂が生まれた場所は畿内の奈良市辺りであろうと言われている。

幼い時から大変聡明で学問を好み、716年、元正天皇の靈龜2年に多治比真人^{たじひのまひとあがたもり}県守らの遣唐使に従って吉備真備^{きびのまきび}・僧玄昉^{げんぼう}らとともに入唐留学生となる。翌717年、3人は同じ船団で中国に向けて出発した。日本の暦では養老元年、唐の年号では玄宗皇帝の開元5年のことである。玄宗皇帝の年号は主に開元年間と天宝年間の二つに分けられており、一般的に開元年間は「開元の治」という言葉が表しているように、唐の初めの頃の大変安定した時代「貞観^{じょうがん}の治」と並んで中国史上、大いに安定して栄えた時期とされている。

3人は西暦734年、天平勝宝6年に帰国の途についたが、その時に船が嵐に遭い、4隻のうち吉備真備・僧玄昉が乗った第1船だけが日本に着き2人は無事帰国を果たしたが、仲麻呂は嵐に遭った。

2. 吉備真備と僧玄昉

吉備真備はもともと吉備地方、今の岡山県の豪族の出で、2018年7月の西日本豪雨で大きな被害が出た岡山県倉敷市真備町が彼の出身地である。吉備真備は唐で経書、つまり国を治めるために思想的な根幹となる哲学・思想関係の本や歴史書、天文学・音楽・兵学などを幅広く学び、多くの典籍を携えて帰朝し大いに活躍した。遣唐使の目的というのは、派遣された人が勉強するだけでなく、中国から多くの本を持ち帰ることも非常に大きな任務であった。そして天平勝宝2年、西暦750年に筑前守に左遷されたが、翌3年、再び入唐使として渡唐し、同6年に帰朝した。つまり吉備真備は当時としては珍しく、2度中国に行ったことになる。帰国後、官は従三位、参議、中衛^{ちゆうゑ}大将^{だいしょう}から右大臣となり、法律などに関する本『刪定律令^{さんていりやう}』を編纂し、正二位に至った。

一方、僧玄昉は帰国後、仏教の確立のために尽くしたが、藤原仲麻呂の台頭によって745年に筑紫観世音寺に左遷され、翌年その生涯を閉じている。

このように、二人のその後の経歴は必ずしも順風満帆というわけではなかったが、



阿倍仲麻呂像
(菊池容斎『前賢故実』による)

唐で学んだ成果を十分に活用したという意味では、入唐の目的を大いに果たすことができたと言える。これに対して阿倍仲麻呂は一度ならず帰国を図ったが、結局それが果たされず、望郷の念を抱きつつも異国でその生涯を終えなければならなかったという意味では悲劇の人生だったと言える。

3. 中国大陸へ

仲麻呂は難波津^{なにわづ}という港から中国大陸に向けて船出をしたといわれている。難波津が現在のどこにあたるかについては正確にはわかっていないが、大阪の上町台地北端部西麓にあたる現在の東横堀川・高麗橋周辺というのが最新の説のようである。要するに当時そこから西側は海だったということであり、そこから見える海の波が速く流れる様子から「なみはや」といい、また難波というようになった。

そして、中国のどの港に着いたかという点、当時の遣唐船の経路を研究した結果、船が着いた港は明州、現在では「寧波^{ニンポー}」といわれるところだと確定している。この寧波というところは港湾都市として発展してきたところで、その北部にある、港としても大変発展してきた大都市上海よりも早くから栄えていた。「小上海」と呼ばれることもあり、今から 10 数年前にそこを訪れたとき、私自身もどことなくその雰囲気を感じられた。

寧波は日本と大変関わりが深いところで、鎌倉時代に曹洞宗の永平寺を開いた道元が修行した天童寺のほか、鑑真和尚が船で難破した時にたどり着き助けられ、長く世話になった阿育王寺など、日本と関係の深い寺院が多く、日本で天台宗を開いた最澄が学んだ国清寺は、寧波からバスで 4 時間ほどの天台山にあり、また時代的には隔たりがあるが、備前出身の僧であった水墨画家の雪舟が遣明船で中国に着いてから最初に登ったのも天童寺である。



阿倍仲麻呂関係地図

4. 入唐後

安倍仲麻呂は数え年で 20 歳の時に入唐留学生となった。以下、年齢はすべて数え年とする。仲麻呂は長安（今の西安）に到着すると名前を中国風に「朝衡」「晁衡」と改めた。仲麻呂が唐の朝廷に仕えて最初に就いた官は左春坊司經局校書きょうしやうという正九品下に属するもので、今の国際状況と単純に比較することはできないとしても、外国人である仲麻呂が唐の王朝に官吏として採用されるというのは驚くべきことだ。この官は日本でいう皇太子の住居にある役所、東宮府に属しており、皇太子に仕えて図書を写したり、校正をしたりするのがその職務内容であった。入唐してから間もない仲麻呂が、このような高度な学問に携わったということは、日本にいた時に漢文を読む力が十分に備わっていて、中国の書物に対する知識も並外れてあったことを物語っている。その官を 721 年、開元 9 年から 727 年まで務める。721 年は数え年で 23 歳なので、今の日本で言えば大学卒業と同じ年齢である。

開元 15 年から 19 年、西暦 727 年から 731 年までは左拾遺という官についている。左拾遺とは従八品上という階位、つまり役人の序列・等級でいえばかなり下の方だが、ともかくも官僚の出世コースに乗ったのだった。左拾遺は仲麻呂の時代である唐代よりも数百年前から設けられていた中央官庁を示す門下省に属する官であり、間違っことをした天子を諫めるのが主な仕事である。外国人がそのような役につくことは考え難いことであるが、このことは、つまり、仲麻呂が皇帝のいるところに近づいたことを表している。

当時、都の長安に、今の日本で言えば東京都知事に相当する職、京兆尹けいちやういんを勤めたことのある崔日知さいじちという人物がおり、その人物が仲麻呂の才能を高く評価し、玄宗皇帝に推薦した。すると玄宗は詔みことり、つまり皇帝の命令を下して仲麻呂を褒め称え、特に拔擢きょくして左補闕さほけつという官につけた。その職務内容は左拾遺とほぼ同じだが、こちらは従七品上の官なので、その前の従八品上と比べると異例の昇進と言える。これは仲麻呂が 34 歳の時のことである。

5. 交遊詩

5-1 儲光羲

仲麻呂は都長安で多くの友人を得たと思われる。ずっと後になって仲麻呂が帰国するに際して詩を贈った王維とは、かなり早くから識りあっていたと思われる。また、当時儲光羲ちやうこうぎという詩人とも交友があったようである。この詩人は南北朝時代の著名詩人、陶淵明の詩を慕い、自然派として王維・孟浩然とも肩を並べる詩人だったが、その儲光羲が唐の副都だった洛陽の近くを流れる伊水いすい（黄河の支流である洛水に流れ込む川）のほとりで、仲麻呂のために次のような詩を作った。

洛中貽朝校書衡 朝即日本人也

洛中にて朝校書衡^{おく}に貽る 朝は即ち日本人なり

| | | |
|-------|-------|---|
| 万国朝天中 | 東隅道最長 | 万国 天中に朝し、東隅 道 最も長し。 |
| 晁生美無度 | 高駕仕春坊 | 晁生 美 ^{はか} 度 ^{はか} る無く、高駕 春坊 ^{つか} に仕う。 |
| 出入蓬山裏 | 逍遙伊水傍 | 蓬山 ^{うち} の裏に出入し、伊水の傍 ^{かたわ} らを逍遙す。 |
| 伯鸞遊太学 | 中夜一相望 | 伯鸞 太学に遊びしとき、中夜 一たび相い望めり。 |
| 落日懸高殿 | 秋風入洞房 | 落日 高殿に懸かり、秋風 洞房に入る。 |
| 屢言相去遠 | 不覺生朝光 | 屢 ^{しば} しば言う 相い去ること遠く、覺えず朝光生ずと。 |

よろずの国が天の中央なる我が国に臣下の礼を執って仕えているが、その中でも東のはてにあるあなたのお国が最も遠いところにある。晁衡どのの優秀さは測り知れないものがあり、この国にはるばるお越しになって皇太子に仕えることになられた。あなたは蓬萊山ともよばれる宮中の書庫に出入りしてお仕事をされ、その合間には伊水のほとりを散策される。その昔、高潔の士梁鴻が大学に勉強に出かけると、真夜中に一度だけ自宅の方をながめたという。あなたもお仕事に熱心で、沈みゆく太陽が高い宮殿の屋根にかかり、冷え冷えとした秋の風が奥深い室内に吹き込んでくることもあった。そしてあなたは私にしばしばこんなことを言われる。「あなたのところから遠く離れた場所にいたところ、いつのまにか朝日が照り始めていた」。

この詩の題名は「洛中にて朝校書衡^{おく}に貽る」となっているが、「洛中」というのは洛陽のことを指しており、洛陽で作ったことがわかる。「朝校書衡」とあるのは「朝衡校書」と同じで、これは朝校書衡に贈った詩ということである。その下の副題、「朝は即ち日本人なり」の「即ち」は「一見そうでない感じがするが、実はこうなのだ」と説明する働きがあり、「朝衡というのは何を隠そう日本人なのだ」というニュアンスを表している。本文に「高駕 春坊^{つか}に仕う」とあることから、仲麻呂が24歳から30歳の間に作られていることがわかる。第1句の「万国 天中に朝し」は、よろずの国が天の真ん中に向かっている、すなわち中国が世界の中心にあって、その他の国は中国を宗主国としてかしづいているという中華思想の図式そのものである。「東隅 道 最も長し」では、東の端の日本は漢民族と接触のあった国の中で最も東の果ての遠い国、そんなところからやって来られたということをいっている。「晁生 美^{はか} 度^{はか}る無く」。「晁生」は晁さんというほどの意味、美は才能が優れていることを表し、異国の人であるかどうか全くこだわらずに、仲麻呂の才能がこの上なくすぐれているという高い評価を与えている。「高駕 春坊に仕う」。「高駕」の「駕」は車や船に乗って遠くからやって来ることを意味し、ここでは日本からやって来て春坊（皇太子）に仕えたとある。「蓬山^{うち}の裏に出入し、伊水の傍を逍遙す」。蓬山というのは蓬萊山という渤海の中にあつたという仙人の住む山のことであるが、ここでは宮中の図書館を指し、そこに入出入りして書物などを管理する仕事をしていたことを意味している。「伊水」は先ほども述べたよう

に、黄河の支流にある洛水のまた支流にあたる川で、その川辺を散策するようなこともあったという意味である。この詩自体が洛陽で書かれたものなので、もしかすると仲麻呂は長安だけではなく、洛陽の仕事もしたのではないかという説もある。第7句の「伯鸞」は中国の後漢時代の賢者梁鴻^{あぐな}の字である。梁鴻は幼いときから学業熱心で、「太学に遊びしとき、中夜 一たび相い望めり」。大学へ行くと一人だけ遅くまで居残り、真夜中に一度だけ自分の家の方を望み見た。つまり、家のことを全く気かけずに一心不乱に勉強した。彼は他の生徒といっしょに食事をするのができなかったといわれている。儲光羲は仲麻呂の勤勉さを梁鴻になぞらえたのだ。「落日高殿に懸かり、秋風洞房に入る」。高い宮殿に夕日がかかって、秋の風が家の中に吹き込んでくる時まで、仲麻呂は一生懸命仕事をしたということである。「屢しば言う 相い去ること遠く、覚えず朝光生ずと」。しばしばあなたはこんなことをおっしゃられる。「私はあなたのところから大変遠ざかっておりますけれども、そうやって一生懸命仕事をしておりますと、気づかないうちに朝の光が白々と昇ってくることもありました」と。要するに、この詩をみると、阿倍仲麻呂が非常に仕事熱心で大変真面目な人であったということを褒めているものであることがわかる。

5-2 趙曄

西暦733年、日本の年号でいうと天平5年、中国の年号では開元21年の4月に難波津から出航した遣唐大使^{たじひのきびとひろなり}多治比真人広成らの一行が8月、蘇州（今の浙江省蘇州市）^{せつこう}に到着していて、遣唐使としての任務が終了したら、翌22年の10月に帰国の途に就くことになっていた。仲麻呂はその噂を聞くと、急に早く故国に帰りたいという思いが湧いてきた。仲麻呂は第8次遣唐使に従って唐に来たが、今回中国にやってきたのはその次の回に当たる第9回の遣唐使で、前回から実に16年の歳月が流れていた。当時のことなのでただ一人のために唐から日本に向けて舟を出すようなことはありようもなく、ましてや仲麻呂は左補闕とはいえ、日本の側から言えば単なる一留学生にすぎず、来た時と同じく、遣唐使が帰国するのに便乗して帰るしかなかった。つまり、遣唐船が日本から到着したということは、仲麻呂にとってまたとないチャンスの到来だったといえる。仲麻呂と時を同じく留学してきた吉備真備^{きびのまきび}と玄昉もこの機会に帰国することになった。在唐17年になる仲麻呂がこのとき帰ろうとしたのは、きわめて当然のことだったと思われる。その時友人であった趙曄^{ちようよう}が次のような詩を書いている。

送晁補闕帰日本国
西掖承休澣 東隅返故林
来称郊子学 帰是越人吟
馬上秋郊遠 舟中曙海陰
知君懷魏闕 万里独揺心

晁補闕の日本国に帰るを送る
西掖 休澣を承け、東隅 故林に返る。
来りて郊子の学と称せられ、帰るは是れ越人の吟なり。
馬上 秋郊遠く、舟中 曙海陰し。
知る君 魏闕を懷い、万里独り心を揺るがさん。

あなたは中書省でのご勤務を一時中断し、休暇を得て帰国する許可をお受けになり、世界の東のはてにあるふるさと日本にお帰りになることになった。あなたは、その昔の鄭の君主のように中国に学問を授けられ、今、^{そうせき}莊舄が楚の高官になっても、故国である越の歌を忘れなかったように帰って行かれる。これからあなたが馬に乗って行かれる郭外は秋空のもととはるか遠くへと続き、また舟で迎える明け方の海は薄暗いでしょう。あなたは朝廷のことを思い続け、はるか万里の旅路の間も、ひとり心を揺さぶられ続けるでしょう。

「晁補闕の日本国に帰るを送る」は、補闕という官についていた晁、すなわち仲麻呂が日本国に帰るのを見送った詩という送別の詩である。「^{さいとせき}西掖 休澣を承け、^{きゆうりん}東隅 故林に帰る」。「西掖」とは西の脇にある建物、中書省のこと、「休澣」とは休みをとってゆっくり風呂に入ること意味する。「東隅」は東の果ての国の日本、「故林」は故郷と同じ意味であり、東の果てである日本に帰ることになりましたということになる。「来りて鄭子の学と称せられ」。「^{ちんし}鄭子」はこの時から千数百年以上も前、春秋時代の魯国の孔子が鄭の国の君主から「官制」を学んだと伝えられている話があるが、それになぞらえ、それほど仲麻呂が唐の王朝に対して有益な事をもたらしたと褒め称えている。「帰るは是れ越人の吟なり」は、楚に仕えた越の人が故郷に帰りたいと愚痴をこぼしたことを表す。「馬上 秋郊遠く」。「郊」はいなかを意味し、秋の郊外は遠い。馬に乗ってどこまでも行かなくてはならないという意味である。「舟中 曙海陰し」。舟の中、明け方の海は暗い、また遠いということを暗いという言葉で表している。「知る君 魏闕を懐い、万里 独り心を揺るがさん」。「魏闕」とは宮殿の外にある大きな門のことだが、ここでは唐の朝廷を意味し、あなたはいつも王朝のことを思い慕い、旅を続ける中でいつも心を揺さぶられているであろう、つまり後ろ髪を引かれるということを言っている。このような送別の詩である。

5-3 阿倍仲麻呂 「失題」

趙曄以外にも仲麻呂の帰国を祝福し、また惜別の情を述べた詩人はあったと思われる。しかし皇帝は有能な人材が失われることを惜しみ、帰国の申し出は許可されなかった。天子の意思は絶対で、それに逆らうことはできず、仲麻呂の落胆ぶりは想像して余りあるものがある。そのときに作った詩に次のようなものがある。その題は不明だが、後世、「失題」として伝わっているものである。

慕義名空在 輪忠孝不全 義を慕いて 名 空しく在り、忠を輪して孝全からず。
報恩無有日 帰国定何年 報恩 日有る無し、帰国 定めて何れの年ぞ。

わたしはこれまで天子に対する義を大切にし、こうして補闕の官を得たが、遠い異国にいて故国に錦を飾ることのできない我が身であれば、そうした名誉も空しい

ものでしかない。天子に対して忠誠心を尽くしてきたが、故郷にいる父母に対しては孝養を尽くすことができないのが恨めしい。このたび帰国の途が絶えてしまったので、自分を生み育ててくれた父母に恩返しをする機会がなくなってしまった。日本に帰ることができるのはあと何年先のことになるだろうか。

「義を慕いて 名 空しく在り」。義を慕うというのは、自分と唐の王朝、あるいは天子に対する義理を十分に果たしたということである。しかしながらこの立派な仕事を国に伝えることができない、故郷に錦を飾ることができないのが非常に残念であるということを言っている。「忠を輸して孝全からず」。忠とは群臣関係、孝は親子関係をいう。「忠」の方は十分に尽くしたけれども、自分の親に対する「孝」の方は残念ながらそれを全うすることができなかった。「報恩 日有る無く」。親に対して恩に報いること、その日はいつ来るだろうか。「帰国 定めて何れの年ぞ」。一体いつ帰れるのだろうかということである。当時の交通事情などを考慮すると、もしかしたら日本に帰る機会がなくなるかもわからないという、やや絶望に近い意味合いが含まれているかも知れない。少なくとも、次の遣唐船を待っていたのでは老親に会うこともできないという無念さがここにはある。

それからさらに 19 年の歳月が流れた天宝 11 年、西暦 752 年のこと、かつて仲麻呂たちが乗った船がついた明州に、19 年ぶりに遣唐船が到着した。今度は玄宗から帰国の許可が出たが、それは皇帝の使者として日本に派遣されるというもので、一時帰国ということであった。仲麻呂は遣唐使の藤原清河が帰国することになったので、それに従って帰国することを決意した。実際に船出をしたのは翌天宝 12 年、日本の年号では天平勝宝 5 年で、仲麻呂はすでに 56 歳になっており、官は宮中の書庫の管理を担当する秘書省の長官である秘書監と兵器の管理をつかさどる衛尉寺の長官、衛尉卿を兼ねていた。「寺」というのは本来お寺ではなく役所を意味する。なお、日中交流史の上で仲麻呂と並ぶ鑑真和尚も日本に渡航するために一行に加っていた。鑑真は揚州の僧で、請われて日本に渡るようになっていた。今、奈良県五條市にある唐招提寺は鑑真和尚が建てたものである。

5-4 王維と仲麻呂

仲麻呂が日本に向けて出発するのを見送った王維の詩が残っている。王維は 699 年に生まれて 759 年に亡くなっているので、その生涯は仲麻呂とほぼ一致する。

| | |
|-------------|---|
| 送秘書晃監還日本国 | 秘書晃監の日本国に還るを送る |
| 積水不可極 安知滄海東 | 積水 ^{きわ} 極む可からず、安んぞ滄海 ^{いずく} の東を知らん。 |
| 九州何處遠 万里若乗空 | 九州何れの處か遠き、万里 空に乗ずるが如し。 |
| 向国惟看日 帰帆但信風 | 国に向かいて惟だ日 ^み を看、帰帆 但だ風 ^{まか} に信すのみ。 |

鰲身映天黒 魚眼射波紅 鰲身 天に映じて黒く、魚眼 波を射て紅なり。
郷樹扶桑外 主人孤島中 郷樹 扶桑の外、主人 孤島の中。
別離方異域 音信若為通 別離 方に域を異にし、音信若為にして通ぜん。

ひろびろと水の続く海のはてはどうなっているかきわめがたい。仙人が住むという滄海のそのまた東のことなど、どうして私にわかるだろうか。この中国の外にある九つの世界のうちでどこがいちばん遠いかというと、それはあなたの行かれる日本なのだが、今あなたは虚空を飛んでいくように万里の船路を行かなければならない。故国に向かって進むときはただ太陽だけをめざし、郷里に帰る船はただ風まかせにするしかない。行く手の海には巨大な海亀がその真っ黒な体を大空に映し出しているであろう。見知らぬ怪魚の目がらんとして波間を射、あたりの海面を赤く染めているであろう。あなたの郷里に生い茂る樹々は太陽を生み出す大木のその向こうにあり、あなたはその孤島の中に住まれることになるのだ。今、わたしたちがここでいったん別れば、まさしく互いに別の世界に住むことになる。これから先どうやって消息を通じ合ったらよいというのだろう。

「秘書晁監」は秘書監の晁衡という意味である。「積水極むべからず、安んぞ滄海の東を知らん」。「積水」は水がどこまでも続いている様子をいい、それを極めることができない。「安んぞ」はどうしてという意味で、どうして青々とした東の海の向こうまでわかることができるだろうか、どんなものがあるかわからないといった不安を表している。「九州何れの処か遠き」の「九州」とは様々な意味があるが、ここでは中国以外に九つの国があるという考え方から全世界のことをいう。ところでその九州の中ではどこが一番遠いかというと、それは日本である。「万里 空に乗ずるが如し」。いまからあなたは最も離れているところに万里を吹く風に乗って飛んで行かれる。「国に向かいて惟だ日を看」。日本国にむかって行くわけだが、太陽が東から昇ることを意識し、日出ずるの国と言われていたように太陽が昇る東へどんどん進んで行くということである。「帰帆 但だ風に信すのみ」。当然これは帆掛け船なので風に任せるだけだということ。「鰲身 天に映じて黒く、魚眼 波を射て紅なり」。この「鰲身」とは大きな亀、想像するしかない世界だが、そこに大きな亀がいるだろう、また「魚眼」、怪しげな魚の眼が波を射るように紅く輝いているだろうということで、今から安倍仲麻呂が帰って行く日本というところがそのような非常に怖くて不気味な想像もつかないところだろうということである。当時の人の意識としてはほとんどそういうものであったと思われる。王維は日本が想像を超える遙か遠いところにあり、今、友人が危険な旅に出ようとしているのを案じてこのように言ったのである。「滄海」も「九州」と同じく、神話にもとづくもので、想像するしかない世界だったのだ。「郷樹 扶桑の外」。「郷樹」とは故郷を意味し、「扶桑」とはよく使われる言葉で桑の木のことなどと言われているが良くわかっておらず、太陽が昇るとされる木のことを扶桑という。扶桑というのは

太陽が生まれるところを意味し、扶桑そのものが日本を表している。もう少し民俗学的に言うと、大きな雌鶏のようなものとされることもある。雌鶏が毎日一つずつ卵を産むことが、東から毎日一つずつ太陽が昇って来ることと重ねて考えられたのだろう。当時は西に沈んだ太陽がまた東から昇ってくるというようには考えられておらず、毎日太陽が一つずつ生まれて来る、そんな雌鶏のようなものが東の海の方であって、そこが扶桑だという民俗学的な研究もある。「主人 孤島の中」。この「主人」は仲麻呂のことを指す。「孤島」は日本のことを表し、そこでこれから暮らすことになるだろうとっている。「別離 方に域を異にし」。これからあなたは絶海の孤島に暮らすことになり、これから先わたしたちはどうやって連絡を取り合ったらいいのだろうとっている。この時代は当たり前のことだが連絡の取りようはない。

この詩は五言排律という形式である。これは初めの2句と最後の2句を除く中間をすべて対句で構成しなければならないということのほか、平仄、簡単に言えば、それぞれの文字が固有に持っているトーンを一字一字考慮して配置しなければならないという規則である。このように規則がやかましく、簡単には作りにくいのが五言排律というスタイルで、王維がこの詩形を用いて送別の詩を書いたのは、仲麻呂に対する深い尊敬と篤い友情、そして身に迫る惜別の情を余すところなく訴えようとしたからだと考えられる。また、この詩には545字にのぼる序文が付されているが、それは異例とも言える長さであり、そこにも王維の積もる思いが纏綿と吐露されている。そして、仲麻呂のみならず、日本に対しても文化程度が高く、道徳的にも優れた国であると、高い評価を与えている。漢民族にとって原則的には日本は野蛮な国だということだったが、ただ漢文を読むということで、日本民族は文化程度が高いのだという認識が生まれてきていたのだと思われる。

次に示す仲麻呂の詩は王維の詩に応えて作ったと思われる。詩形が全く同じく12句の五言排律であること、そして、「平生の一宝剣、留贈す 交わりを結ぶの人」は誰か特定の人物に対する言葉であり、王維の「別離 方に域を異にし、音信 若為にして通せん」に応えているかのように感じられるからだ。また、王維の「扶桑」は仲麻呂の「若木」と同類のことばであり、仲麻呂の「蓬萊」は王維の「滄海」に応じている。

| | |
|-------------|---|
| 銜命使本国 | 命を銜 ^{あぐ} んで本国に使いす |
| 銜命将辞国 菲才忝侍臣 | 命を銜 ^{あぐ} んで将に国を辞せんとす。菲才 侍臣 ^{かたじけの} を忝うす。 |
| 天中恋明主 海外憶慈親 | 天中 明主を恋い、海外 慈親を憶う。 |
| 伏奏違金闕 駢駢去玉津 | 伏奏 金闕 ^{きんけつ} を違 ^{まち} り、駢駢 ^{ひさん} 玉津に去る。 |
| 蓬萊郷路遠 若木故園隣 | 蓬萊 郷路遠く、若木 ^{じやくぼく} 故園の隣。 |
| 西望懷恩日 東帰感義辰 | 西望 恩を懷うの日、東帰 義に感ずるの辰 ^{とき} 。 |

平生一宝剣 留贈結交人 平生の一宝剣、留贈す 交わりを結ぶの人。

玄宗皇帝の命をうけて唐の国に別れを告げんとするに当たり、才能薄き私が侍臣としてお仕えすることができたことを感謝するばかりである。天下の中央に位置する唐の英明の君主、玄宗をお慕いし、後ろ髪を引かれる思いがするが、遠い海の外にいる慈しみ深い親を思う気持ちは募るばかりである。私は恭しくいとまごいの挨拶をして宮殿をあとにすることになった。これから四頭立ての馬車に乗って、玉のように美しい蘇州の港へと向かうのだ。仙人が住むという蓬萊山のあたりにある故国への道のりは遠く、太陽が昇る若木は故国の隣にある。郷里に帰れば西の長安を望んでは君主の恩義を思い出す日ばかりであろう。東の日本に帰れば、いつも諸君の友誼に感じていることであろう。私はふだんから大切にしていたこの宝剣を、親しく交遊関係を結んでくれたあなたに記念として贈りたい。

この詩は仲麻呂のいくつかある詩の中で最も有名な詩であるとも言えるかも知れない。「命を銜んで本国に使いす」は命令を受けて本国日本へお使いするの意味。あくまでも一時帰国なのである。「命を銜んで将に国を辞せんとす」。「菲才 侍臣を忝うす」の「菲才」は才能に乏しいこと。自分のような才能に乏しい人間が、「侍臣」つまりお付きの家来として参することができた。「天中 明主を恋い、海外 慈親を憶う」の「天中」とは唐の王朝のことをいう。ここにいる玄宗皇帝のことを恋しく思う。しかし海外では慈しみ深い両親のことが気が気でたまらない。つまり天子に対する忠と親に対する孝が矛盾し対立するものとして出てきている。「伏奏 金闕を違ひ、駢驂 玉津に去る」。「伏奏」とは天子に申し上げる、「金闕」は宮殿、「駢驂」は馬、「玉津」は港を意味する。天子に別れの挨拶をし、宮殿を去り、馬に乗って蘇州の港へ行く。「蓬萊 郷路遠く、若木 故園の隣」。「蓬萊」とは東の海の方にある仙人が住むところ、これは日本を表す。「若木」は扶桑のこと。「故園の隣」とあるので扶桑は日本の手前にあると言っている。「西望 恩を懐うの日、東帰 義に感ずるの辰」。西の方を望んで中国の皇帝のことを思う時は、やはり義に感じながら東の方へ帰って行く。「平生の一宝剣、留贈す 交わりを結ぶの人」。自分が持っている大事なこの剣を仲の良かった人に差し上げましょう。これは剣を差し上げるということよりも恩に応えたいということであろう。

王維の詩に立派に応えうる構成のしっかりした格調高い詩である。仲麻呂はこのような五言排律を作ることができるほどに、詩才が磨かれていたのであって、王維らの友人たちもそれを知っていたのだと思われる。第七・八句は実際に宝剣を贈ったともとれるが、何かの象徴ではないかとも考えられる。いずれにしても宝剣には特殊な能力があるとする考え方が古くからあって、宝剣を贈るという行為は友情への返礼であり、王維と仲麻呂の友情が非常に篤かったことを示している。

5-5 李白と仲麻呂

このようにして仲麻呂の乗る船は蘇州の海浜から出航したが、船が奄美大島近海まできたときに暴風にあい、安南、つまり今のベトナムの驩州^{かんしゅう}というところに漂着した。人びとの間では、船が沈没して安倍仲麻呂が死んだと伝えられ、それはやがて李白にも届いた。その噂に接したとき、李白の胸には大きな驚きと深い悲しみがわきおこったに違いない。李白は次のような詩を作って親友の死を悼んだ。実はこの時仲麻呂は死んでいなかったが、李白は死んだと誤解したわけだ。これは大変有名な詩である。李白の時代の発音とはもちろん異なるが、音の上から李白の悲痛な胸の内が伝わって来るように思われるので、ここでは、原文とともに現代中国の音による読み方を示しておく。王維の詩に比べると大変短い詩であるが、こちらの方が非常に凝縮されている詩だと思われる。

哭晁卿衡

晁卿衡を哭す

日本晁卿辞帝都 征帆一片遶蓬壺 日本の晁卿 帝都を辞し、
征帆一片 蓬壺を遶る。
明月不歸沈碧海 白雲愁色蒼梧滿 明月帰らず碧海に沈み、
白雲愁色 蒼梧に満つ。

日本の晁卿どのは都長安に別れを告げると、旅の舟は一ひら帆を揚げて仙山蓬萊をめぐり、その先にある日本へ帰っていった。夜空に浮かぶ月のように光り輝いていた君は深い青海原に沈んでしまっただ。白雲は深い愁いの色をたたえて蒼梧の山の空に満ちている。

Riběn Cháo qīng cí didū, zhèngfān yí piàn rào pénghú.

Míngyuè bù guī chén bīhǎi, báiyún chóusè mǎn Cānwú.

「晁卿衡を哭す」。「哭す」というのは死を悼むという意味。「卿」は〇〇さん、つまり、晁卿さんということ。「日本の晁卿 帝都を辞し、征帆一片 蓬壺を遶る」。日本の晁卿さんが都長安を去って、船は蓬萊山をめぐって東の方に旅を続けました。「名月帰らず 碧海に沈み」。「名月」はもちろん仲麻呂のことを意味するのであろう。ところが名月は帰ることができずに、青々とした海に沈み、当然海の藻屑になってしまったというのであろう。「白雲愁色 蒼梧に満つ」。白い雲が愁の色をたたえて、偉大な天子が崩御した「蒼梧」という山の上に満ちている。

仲麻呂と李白の交友の程度がどの程度であったか一般には明かにされていないが、かなり長期間に渡って親密な交流があったであろうとする研究がある。この詩に現れ



李白像
(解義勇画、著者蔵)

た李白の悲しみもそれを証明すると思われる。結句の「蒼梧」は山の名で、いまでは伝説ということになっているが、上古の時代の3人の聖天子、つまり最も優れた3人の天子といわれる堯・舜・禹の2番目に当たる舜帝がその山麓で崩御したとされる山である。仲麻呂の死は李白にとって聖天子の死に比すべき悲しい事件だったのだろうと思われる。白い雲が愁の色をたたえ、蒼梧のあたりに漂っている、満ち溢れているというのは、天も悲しんでいるということを表している。

今、中国の西安市にある興慶公園には李白のこの詩が書かれた詩碑が建てられている。四角柱の形をしたその碑の別の面には仲麻呂の「望郷の詩」が刻まれている。その内容は「あまのはら」の歌とほぼ同じである。歌が先か詩が先かということに関しては結論が出ていないようだが、私は漢詩が先のように考える。先述した李白の詩の3句目に名月とあり、次の「望郷の詩」の最後のところに「皎月 円かならん」とある。もしかすると仲麻呂はこの詩を作り、その後和歌に変え、漢詩を李白がよんだのではないかと考えられる。そうすると、船が出るときに、「みかさの山にいでし月かも」と詠んだのではなく前々から作っておいたということにもなる。

望郷詩

望郷の詩

翹首望東天 神馳奈良辺 首を翹^あげて東天を望めば、神^{しん}は馳^はす奈良の辺り。

三笠山頂上 想又皎月円 三笠 山頂の上、想^{こう}う又^{げつ}皎月 円^{まどか}かならん。

頭を上げて東の空を眺めていると、心は遠く奈良の辺りに馳せ飛んで行く。三笠山の山頂の上に白い月が円くかかっているのをまた懐かしく思い出した。

「首を翹げて東天を望めば、神は馳す奈良の辺り」。「神」は心を意味する。頭をあげて東の空を眺めていると、心は遠く奈良の辺りへ飛んで行く。「三笠 山頂の上、想う又皎月 円かならん」。三笠山の山頂にかかっているあの真っ白い月は今でもまん丸であろう。



西安市にある阿倍仲麻呂記念碑(著者撮影)

おわりに

仲麻呂は九死に一生を得て長安に舞い戻ったが、ついには日本に帰ることができなかった。再び唐朝に支え、官は門下省の左散騎常侍、これは従三品だが、その左散騎常侍や安南都護などを歴任した。安南都護というのは、当時ベトナムのことを安南とっており、その地方の統治のために置かれた安南都護府の長官である。つまり仲麻呂は再びベトナムに行ったことになる。そして北海郡開国公を兼ね食邑三千戸を賜ったと記録されている。死亡したのは杜甫が死亡したのと同じ、代宗の大暦5年、西暦770年、73歳だった。

中国歴代王朝は周辺の国々に対して冊封関係^{さくほう}という関係を結んでいた。冊封関係というのは中国が天子のような立場に立ち、他の国々が朝貢国、つまり、貢ぎ物をする国となって家来として仕えるという関係であるが、日本は冊封国ではなかった。一地方政権であった卑弥呼の邪馬台国の時代に一時、中国の漢の朝貢国になったことがあるが、その時も冊封関係や群臣関係はなかった。またその後は中国の王室の勢力圏内に入ったことはない。そのようなことから考えると、唐の天子玄宗がここまで阿倍仲麻呂を大切にし、高官にまで昇進させたというのは、唐王朝の度量の広さ、あるいは人材を欲する気持ち、そして何より仲麻呂が非常に優れていた故だと結論づけられる。

(2018年10月22日、生活美学研究所関西文化研究会における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学生生活環境学部教授 管 宗 次